

「…と…(と)」の等位接続構造に関する統語的考察

A Syntactic Study of Coordinated Structures of ‘... to ... (to)’ in Japanese

徐佩伶
淡江大学

要旨

本稿は、日本語における「…と…(と)」等位接続構造について考察を行うものである。「と」によって連結される等位句には二種類の形式が見られ、「…と…と」のような、最後の等位項の後に「と」をつける形式と、「…と…」のような最後の等位項の後に「と」をつけない形式である。先行研究の多くではその両形式が同じ基底構造をもつと仮定され、最後の等位項の後に現れる「と」が音韻的な重複として捉えられている (Vermeulen 2008)。本稿では、その「音韻的な重複」である「と」の実現について考察し、「…と…と」形式と「…と…」形式における等位項の統語的な特徴を調べる。数量詞・計量詞、そして時間副詞等が等位項に生起する際に「と」等位接続句として文の容認度が異なるという事実を提示し、統語的な観点から両形式の構造を論じる。

キーワード

「と」等位接続詞、統語構造、数量詞/計量詞、動詞句

「…と…(と)」の等位接続構造に関する統語的考察¹

徐佩伶
淡江大学

1. 問題提起

本稿では「…と…(と)」というような等位接続構造を対象に、等位句の最後に「と」が現れる場合（「…と…と」）と現れない場合（「…と…」）との両形式を統語的観点から考察する。この両形式を示す具体例は(1)である²。(1a)は「曠野」と「空」の後に「と」を付ける例であり、(1b)は後件の等位項「空」の後に「と」を付けない例である。

(1) a. 「…と…と」

僕の前に、一人のアラブ人がじっと動かないで、**曠野と空**を見つめている。
(レーモン・クノー著・宮川明子訳 (2003) 『オディール』)

b. 「…と…」

僕の前に、一人のアラブ人がじっと動かないで、**曠野**と**空**を見つめている。

「…と…(と)」という等位句は「を」格を取るほかに、(2)に示している例のように、「が」格と、助詞の「で」を取ることもある³。

(2) a. 意識と現実(と)が衝突して一つの amalgam を作り出す、といってもよい。 (秋山駿 (2003) 『神経と夢』)

b. 恋愛というものへの認識が**男と女(と)**では全然違うのだ。(佐藤環妃・加藤きなこ・田口ランディ (2002) 『COSMOPOLITAN 日本版』)

また、「と」は二つ以上の名詞句を連結することができ、並列される名詞句の数によって等位接続の構造が大きくなることがある。具体例を(3)に示す。

(3) さまざまな変化の結果、現在の地球は、水の惑星ともよばれる豊かな**水と土と大気(と)**におおわれた惑星になっている。(三浦登ほか著 (2005) 『新しい科学2分野下』)

¹ 本論文は「2017年日本比較文化学会第39回全国大会」で口頭発表した内容を修正し加筆したものである。

² 本稿における例文の容認性は三名~四名の日本語の母語話者に判断してもらったものである。個人差はあるが、本稿では個人差の少ない例のデータを中心に議論を進めた。

³ 本稿は「…と…(と)」の等位構造の内部構造を考察することが目的であるため、「…と…(と)」の等位句が文中における統語位置とその解釈に関して別稿で論じたい。

(3)では、「と」が三つの等位項（水、土、大気）を連結し、等位句の最後に「と」が現れても現れなくてもよい。このことから、等位項の数が等位句の後の「と」の実現可能性において関係がないことを表し、本稿では便宜上議論に用いられる例を等位項二つに限定しておきたい。

「…と…と」形式と「…と…」形式に関していくつかの先行研究で議論されている（益岡・田窪 1992, Koizumi 2000, Takano 2002, Fukui and Sakai 2003, Vermeulen 2008）。これらの先行研究では、「…と…と」形式と「…と…」形式が同じような基底構造をもつと考えられている。益岡・田窪（2006）は、「ト」を総記を表す並列表現の一つとし、並列される要素の最後に付けても付けなくてもよいと述べている。Fukui and Sakai（2003）では、「…ト…」形式と「…ト…ト」形式が同じ構造をもち、後件要素の後に現れる「ト」がオプショナルであると考えられている。Vermeulen（2008）は、「…ト…（と）」の等位構造における一番目の「と」が等位接続句の主要部として機能するが、二番目の「ト」が等位接続句の主要部として機能せず、単なる「ト」の音韻的な重複（duplication）であると主張している。一方、上述した先行研究に対して、Asada（2014）は、日本語の等位接続詞「と」の重複形（RC-と）は、「ガ・ノ交替」、「コピュラー文」との共起に見られる統語制限から、焦点化詞であると主張している。(4)(5)の例では、「RC-と」が現れると、連体修飾節の中の「ガ・ノ交替」が妨げられるという事実を示している。

(4) [太郎と次郎 が/の 飲んだ] ワイン (Asada 2014:99 (3))

(5) [太郎と次郎と が/*の 飲んだ] ワイン (Asada 2014:99 (4))

Asada（2014）では、最後の等位項の後に現れる「と」がオプショナルなものではなく、焦点化詞として機能すると指摘されているが、その「と」の実現に関わる統語的条件は何か、といった問題には言及されていない。

本稿では、数量詞/計量詞、時間副詞を用いて「…と…と」形式及び「…と…」形式におけるそれぞれの等位項の構造を考察し、等位句の最後に付く「と」の実現について構造に関与しているか、特定の範疇に限定しているかを論じる。結論から言うと、「…と…と」形式における等位項が名詞句に限り、「…と…」形式における等位項は名詞句も動詞句も可能であり、等位句の後に現れる「と」は必ずしもオプショナルなものではないと主張し、Asada（2014）を支持することになる。

2. 基本事実

等位接続詞「と」が名詞のほかにも、名詞より大きい句を連結する場合がある (Koizumi 2000, Takano 2002, Fukui and Sakai 2003, Vermeulen 2008)。具体例を(6)に示している。

- (6) a. 太郎が [スーパーでバナナを三本] と [八百屋でみかんを一袋] 買った。
b. 太郎が [昨日スーパーでバナナを三本] と [今日八百屋でみかんを一袋] 買った。

(6a)では、「スーパーで」のような場所を表す後置詞句が等位項の中に現れ、(6b)では、「昨日」のような時間副詞が等位項の中に現れている。このことから「と」が名詞より大きい句を連結することができるということが分かる。この場合、等位句の後に「と」が現れたら文の容認度が下がってしまう。それを示す具体例を(7)である。(7)では、時間副詞「昨日」と数量詞「三本」が等位項の中に生起する場合において、(7b)が示しているように、後件の等位項の後に「と」が現れると、文が容認されにくくなる。

- (7) a. 太郎が [昨日バナナを三本] と [今日みかんを一袋] 買った。
b. *太郎が [昨日バナナを三本] と [今日みかんを一袋] と 買った。

同様に、「と」が名詞句より大きい構造を持つ等位句の後に現れないという事実は(8)(9)に示している例にも観察される。(8)は時間副詞「昨日」と計量詞「一時間」が等位項に生起する例であり、(9)は時間副詞、数量詞のほかにも相手を表す「に格」の名詞「ジョンに」も生起する例である。(8b)と(9b)が示すように、いずれも後件の等位項の後に「と」が現れると容認度が下がる。

- (8) a. [日本語を昨日一時間] と [英語を今日二時間] 勉強した。
b. *[日本語を昨日一時間] と [英語を今日二時間] と 勉強した。
(9) a. メアリーが [ジョンにリンゴを昨日二つ] と [ボブにバナナを今日三本] 買った。
b. ??/*メアリーが [ジョンにリンゴを昨日二つ] と [ボブにバナナを今日三本] と 買った。

もし、等位句の最後に現れる「と」がオプションナルだとすれば、それが現れても現れなくても(7)-(9)に示したような統語的な違いが生じないはずである。よって、等位句の最後に現れる「と」がオプションナルなものではないと考えたい。以下、等位句の最後に現れる「と」の実現条件および「...と...」形式と「...と...と」形式の統語構造について考察していく。

3. 考察

等位句の最後に付く「と」の実現が可能な事実として挙げられた(1)-(3)の例では、等位項がいずれも「裸名詞」であるという点に注目されたい。等位項が「裸名詞」の場合に限るとするのは等位句の最後に現れる「と」の実現条件として成り立つのかという問題が出てくる。その問題を検証するには、「裸名詞」以外にどのような構成素が可能であるのかということを見ていく必要がある。(10)では、「ホスト名詞+数量詞/計量詞」という連鎖が等位項に現れ、等位句の後に「と」が実現可能であり、いずれも容認可能な文である。

- (10) a. [バナナ三本] と [みかん一袋] (と) を買った。
 b. [日本語一時間] と [英語二時間] (と) を勉強した。

「バナナ三本」「日本語一時間」のような連鎖は、後ろに格助詞が直接付くことができることから、全体が名詞句として考えられる (Nakanishi 2003) ⁴。それを示す例は(11)(12)である。

- (11) a. [学生三人] がパーティーで踊った (こと)。(Nakanishi 2003 (1a))
 b. [水三リットル] が机の上でこぼれた (こと)。(Nakanishi 2003 (2a))
 (12) a. [バナナ三本] を買った。
 b. [日本語一時間] を勉強した。

また、前件か後件の要素だけが裸名詞として現れる場合でも、「ホスト名詞+数量詞/計量詞」のような構成素と連結することができる。(13)が示すのは後件の等位項だけが裸名詞を含む例場合であり、(14)が示すのは前件の等位項だけが裸名詞を含む例である。いずれのパターンにおいても等位句の後の「と」の実現が許される。

- (13) a. [バナナ三本] と [みかん] (と) を買った。
 b. [日本語一時間] と [英語] (と) を勉強した。
 (14) a. [バナナ] と [みかん一袋] (と) を買った。
 b. [日本語] と [英語二時間] (と) を勉強した。

⁴ Nakanishi (2003)では、ホストの名詞の直後に現れる数量詞 (Classifier Phrase : CIPs) と計量詞 (Measure Phrases : MPs) を Non-Floating Quantifiers (Non-FQs)と呼び、「ホストの名詞+CIPs/MPs」は全体一つの名詞句の構造をなすと考えている。

さらに、(15b)(16b)が示すように、「バナナを三本」という格助詞「を」が前件の等位項に入っている場合でも、後件の等位項が名詞であれば「と」の実現が可能である。

- (15) a. [バナナを三本] と [みかん]を買った。
 b. ?[バナナを三本] と [みかん]とを買った。
- (16) a. [日本語を一時間] と [英語] を勉強した。
 b. ?[日本語を一時間] と [英語] とを勉強した。

ところが、(15)(16)に示した等位項の前後位置を変えてみると、文の容認度が変わってくる。まず(17)と(18)に示す例を見てみよう。(17)と(18)では、「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖が後件の等位項に現れており、(17b)と(18b)が示しているように、その連鎖の後に格助詞が現れることができない。

- (17) a. [バナナ] と [みかんを一袋] 買った。
 b. *[バナナ] と [みかんを一袋] を買った。
- (18) a. [日本語] と [英語を二時間] 勉強した。
 b. *[日本語] と [英語を二時間] を勉強した。

この事実から、「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖は「ホスト名詞＋数量詞/計量詞」と異なり、統語的に名詞句として捉えられないということが分かる⁵。「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖は名詞句ではないという統語条件の下で、(19)が示すように、「と」が後件の等位項の後に現れることができない。

- (19) a. *[バナナ] と [みかんを一袋] と 買った。
 b. *[日本語] と [英語を二時間] と 勉強した。

⁵ Vermeulen (2008)により、対格が等位項「と」のあとに実現したら、等位項の中に実現することができないという相補分布の関係をなしている。

- (i) a. バナナ (*を) 三本 (*を) とを
 b. バナナを 三本 (*を) と (*を)
 c. バナナ (*を) 三本を (*と (を)) (Vermeulen 2008 (10))

Vermeulen は、(i-a)と(i-b)における対格の実現に関して、音韻的再順序付け (phonological reordering process) という操作を仮定した。格が「ト等位句」のあとに現れるのは、格が音韻的に再整理し、対格がト等位項の後件の動詞句からト等位句の外に再位置すると分析している。Vermeulen は(i-a)と(i-b)が同じ基底構造を持つと考えられている。筆者はそれに対してそれぞれ異なる基底構造をもつと考える。

これらの事実から、後件の等位項は範疇が名詞句以外のものが現れると、等位句の最後に「と」が現れないということが分かった。よって、「…と…と」形式の成立に関して(20)に示すような一般化ができる。

(20) 「…と…と」形式が許されるのは、等位項が**名詞的**である場合に限る。

「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖は、名詞的なのか、動詞的なのかについていろいろ先行研究では議論されている(Koizumi2000、Fukui & Sakai2003、木村 2003)。木村(2003)では、「名詞句＋格助詞＋数量詞」について、(21)のように考えている。

(21) 名詞句＋格助詞＋数量詞(あるいは副詞)からなる連鎖は、名詞句あるいは動詞句という構成素をなす。(木村 2003:139 (26))

(15)と(16)における「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖は前件にして、後件の裸名詞と連結できることから、名詞的だと考えることができよう。しかし、(21)により、「ホスト名詞＋格助詞＋数量詞/計量詞」という連鎖が動詞句でもあるという可能性を排除することができない。そこで、名詞句なのか、動詞句なのかをはっきりさせるために、その連鎖の中に時間副詞を入れて検証することにする。時間副詞や場所を表す後置詞句を入れると、構造が名詞句を越え、動詞句、あるいはそれより大きい構造になり、(20)の仮説から等位項が動詞句になると「…と…と」のパターンを許さないと予測される。具体例を(22)と(23)に示す。

- (22) a. [バナナを昨日三本] と [みかん] を買った。
b. ??[バナナを昨日三本] と [みかん] とを買った。
- (23) a. [日本語を昨日一時間] と [英語] を勉強した。
b. ??[日本語を昨日一時間] と [英語] とを勉強した。

予測通り、(22b)と(23b)に示した文には等位句の最後に「と」が現れると容認度が下がり、この事実は(20)に示した条件によって捉えられる。一方、等位句の最後に「と」が現れない(22a)と(23a)では、等位項には名詞句より大きい構造を持つ動詞句またはその投射を許し、「…と…」形式に関して(24)のように仮定する。

(24) 「…と…」では、等位項が名詞句より大きい構造(動詞句、または動詞の投射)をもつことができる。

以上、「...と...と」形式及び「...と...」形式の中で、「と」の前に現れる等位項の範疇が異なるという事実を示した。「...と...と」では等位項が名詞的でなければならないのに対し、「...と...」では等位項が名詞的なものも、動詞的なものも現れうるということである。

4. 構造

本節では構造について考える。(19)に示した例には新たな問題が潜んでいる。

- (19) a. [バナナ] と [みかんを一袋] (*と) 買った。
b. [日本語] と [英語を二時間] (*と) 勉強した。

(19)では、等位句の最後に「と」が現れると文が容認されにくいという事実を示した。そして、どんな問題が生じたかと言うと、もし(19)における「みかんを一袋」という「ホスト名詞+格助詞+数量詞/計量詞」の連鎖を名詞句として捉えれば、(15)と(16)に示した例（以下に再掲する）のように、(20)の条件に違反せず、容認できる文になるはずである。

- (15) [バナナを三本] と [みかん] (?と) を買った。
(16) [日本語を一時間] と [英語] (?と) を勉強した。

それでは、これらの文の文法性の違いをどのように捉えるべきであろうか。本稿ではその違いは構造の違いに帰結することができると考える。(15)(16)と(19)が示した異なる容認性は、「バナナを三本」というような連鎖が名詞的であるかどうかという問題だけではない。「バナナを三本」「日本語を一時間」のような連鎖は、前件に置かれると「名詞的」として捉えられうるのに対し、後件に置かれると「名詞的」として捉えられないということのほうが問題である。実は後件に置かれる「ホスト名詞+格助詞+数量詞/計量詞」という連鎖が名詞句にならないわけではない。ただし、統語的に名詞句であることを表すには、格助詞「を」をその後ろにつける必要がある。具体例を(25)と(26)に示す。

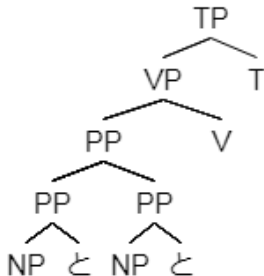
- (25) a. *[バナナ] と [みかんを一袋] を買った。
b. * [バナナ] と [みかんを一袋] と買った。
c. ? [バナナ] と [みかんを一袋] とを買った。
(26) a. * [日本語] と [英語を二時間] を勉強した。
b. * [日本語] と [英語を二時間] と勉強した。
c. [日本語] と [英語を二時間] とを勉強した。

(25a, b)(26a, b)では、対格の「を」や「と」のどちらかが単独に現れる場合であり、文がいずれも容認されない。一方、(25c)と(26c)に示された例のように、「…と…と」の後に対格が現れ、「…と…と」全体が述語が取る一つまとまったものとして解釈されると、容認度が上がる。この事実は、「ホスト名詞+格助詞+数量詞/計量詞」という連鎖が後件に置かれても名詞句になりうるということを裏付ける。しかし、そのような連鎖は名詞句になったり動詞句になったりするわけではない。「ホスト名詞+格助詞+数量詞/計量詞」という連鎖の中に動作を行う場所を表す後置詞句を入れることで、文が名詞句より大きい動詞句の構造を持つことになる。その場合、「…と…と」は全体が述語が取る一つまとまりではなく、対格をつけることもできず、(27)が示すように、文の容認度が下がってしまう。

- (27) a. *[バナナ] と [みかんを八百屋で一袋] とを買った。
 b. *[日本語] と [英語を家で二時間] とを勉強した。

(25c)と(26c)の文が容認できて、(27)が容認できないという事実は、(20)に示した一般化、すなわち「…と…と」形式に現れる等位項が名詞に限るということによつて捉えられる。(25c)と(26c)における「…と…と」は全体が二つのト句 (PP) からなる構造であり、目的語位置に生起すると動詞から対格が与えられ、主語位置に生起すると主格が与えられる。「…と…と」の基底構造を(28)のように仮定することができる。

- (28) [PP[[NP] と] [[NP] と]] V-T

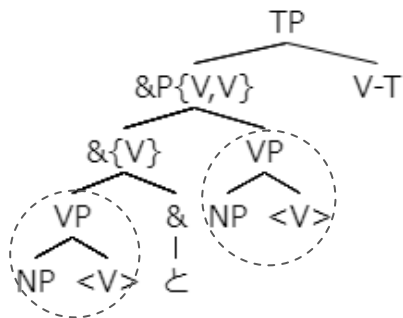


なお、(19)における後件の要素が名詞的である可能性を排除し、仮に動詞句の構造を持つとすれば、なぜ等位句の後に「と」が現れないのであろうか。(29)に示した例も同様である。これらの例はいずれも等位句の後に「と」をなくすと容認度が上がる例である。

- (29) a. 太郎が [昨日バナナを三本] と [今日みかんを一袋] (*と) 買った。 (=7)
 b. [日本語を昨日一時間] と [英語を今日二時間] (*と) 勉強した。 (=8)
 c. メアリーが [ジョンにリンゴを昨日二つ] と [ボブにバナナを今日三本]
 (?/*と) 買った。 (=9)

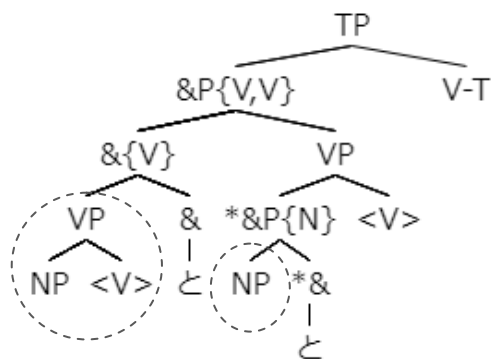
Koizumi (2000) と Vermeulen (2008) に従い、これらの例では、前件の要素も後件の要素も動詞句の構造をなすと考える。その構造を(30)のように仮定する。

(30) $[_{VP}[_{VP} \text{ NP } \forall]]$ と $[_{VP} \text{ NP } V]$ -T



前件の等位項の中に基底では動詞があったが、派生の段階で前件にある動詞が音韻的に消されるという分析や、ATB 移動で前件と後件にあった動詞 V が T に付加するという分析などがある⁶。いずれの分析も「と」が二つの動詞句を取るという基底構造を仮定している。(30)のような構造では、後件の等位項に現れる「ホスト名詞+格助詞+数量詞/計量詞」は動詞句が取る項であり、「動詞句」(VP)を連結する「と」が動詞句の中の名詞句だけと結ぶことができない。その構造を(31)に示すことができる。

(31)



⁶ 例えば、音韻的削除によって前件の等位項の中の動詞が削除されるという分析 (Fukui & Sakai 2003) や、動詞の全域的移動 (Across-The-Board movement : ATB 移動) によって動詞が時制の主要部 T に移動されるという分析 (Koizumi 2000) などがあり、議論がまだ定まらない。前件にあった動詞がどのように派生の段階で消されたかという議論をここで割愛する。

(31)の構造では、等位接続詞「と」が二つの動詞句 VP を取り、「と」が後件の VP 中の名詞句の後に現れることができない。仮に名詞句の後に「と」が現れるとしても前件の動詞句 VP と一つの等位接続構造をなすことはない。この分析を用いて(29)に示された文の非文法性を説明することができる。そして、日本語の「と」等位接続構造は前件と後件が範疇が同じでなければならないという制限があることが分かる。「…と…と」形式は等位項が名詞句に限り、「…と…」形式は等位項が名詞句も動詞句も可能だということを本論で示した。

5. 結論

本稿では、「…と…と」形式及び「…と…」形式を対象に、統語的観点から「と」等位接続構造について考察した。多くの先行研究 (Koizumi 2000, Takano 2002, Fukui & Sakai 2003, Vermeulen 2008 など) では、(32)のような非構成素からなる「と」等位句の構造が動詞句なのか名詞句なのかを論じる際に、「…と…と」及び「…と…」が同じ構造であることを前提にして議論されることが多い。本稿では、「…と…と」及び「…と…」は異なる構造を持つということを指摘しておきたい。

(32) メアリーが[[ジョンにリンゴを二つ] と [ボブにバナナを三本]] あげた。

(Vermeulen 2008 (3))

「と」が名詞句も動詞句も連結することができるが、等位句の最後に付く「と」は等位項が名詞句を取る場合のみ実現可能である。その「と」の実現は Asada (2014) が主張するように、「焦点化詞」としての機能を果たすためであろう。「焦点化詞」として機能する「と」は後置詞として考え、補部を取る名詞句に焦点を与えている。そうすると、「…と…」の構造において、「と」が「焦点化詞」として等位句の最後に現れないということは構造上その「と」が実現できる統語環境ではないと考える。つまり、日本語の「と」等位接続構造は前件と後件が範疇が同じでなければならないため、「と」が動詞句を結びながら、名詞句を補部を取る焦点化詞の「と」とは構造的に等位関係をなすことはない。よって、等位項が動詞句である場合、焦点化詞として機能する「と」、即ち、等位句の最後に付く「と」が現れないということを統語的観点によって捉えられよう。

参考文献

- Asada, Yuko.(2014)“On the Nature of the Repetitive Coordinator To in Japanese,”*Gengo Kenkyu* 145, 97-109
- Fukui, Naoki & Sakai, Hiromu. (2003). “The visibility guideline for functional categories: verb raising in Japanese and related issues,” *Lingua* 113, 321-375
- Koizumi, Masatoshi. (2000). “String vacuous overt verb movement,” *Journal of East Asian Linguistics* 9, 227-285
- Nakanishi, Kimiko. (2003). “Semantic properties of (non-) floating quantifiers and their syntactic implications,” *Japanese/Korean Linguistics* 12, 365-376
- Takano, Yuji (2002). “Surprising constituents,” *Journal of East Asian Linguistics* 11, 243-301
- Vermeulen, Reiko. (2008). “Nonconstituent Coordination in Japanese: A Case of Phonological Reordering,” *Linguistic Inquiry* 39, No 2, 345-354
- 木村宣美 (2003) 「遊離数量詞の構成素性について」『人文社会論叢 9』,129-144
- 木村宣美 (2005) 「遊離数量詞と述語」『人文社会論叢 13』,41-53
- 益岡・田窪 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版』くろしお出版
『中納言』現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版)